

# 心をよつめる

その1

北九州市内・近郊の寺院の僧侶に、老後を心豊かに生きるためのヒントをいただく新コーナーです。



浄土真宗本願寺派 浄光寺 住職  
大沼 顕隆（おおぬま けんりゅう）さん

『門司区大積で地元の方々と深く関わり、共に学んでいます。』



浄光寺  
北九州市門司区大積 839  
TEL 093-341-8143

## 今（こ）こ（こ）の私に

『阿弥陀とは みなみにあるを知らずして 西を願ふは はかなかりけり』

皆さんご存知、とんちで有名な禅僧一休さん。一休さんは禅僧ではありませんでしたが浄土真宗本願寺派第八代宗主の蓮如上人と大変親しいお付き合いをされたお方でもありました。

ある人が、一休さんに「阿弥陀仏の浄土は西方浄土というが、何故西にあるのか？」と質問したそうです。それに対し一休さんは一通りのご返答の後に、加えて右の詩を詠まれました。

『仏説阿弥陀経』というお経に、お釈迦さまが「是れより西方に十万億の仏の国を過ぎたところに阿弥陀仏の浄土がある」と説かれます。先人は古来

より自身の人生について、ある時は四季を準備、またある時は一日に準備して語られました。確かに一日の始まり、太陽が東の空に昇り出る姿は何とも言い難い感動と、その目映さには生命の始まり、力強さを感じます。一方で同じ太陽が一日の終わりに、西の空にその輝きを失い、朱く染まり静かに沈みゆく姿には、寂しさといいしれぬ懐かしさがあります。東の方処は生の依って起こるところ、西の方処は死の趣向するところとして、阿弥陀さまは、この私たち、凡夫の情に寄せて、いのちの帰すべき方処を西方と選んでお浄土を建立されたと説かれたのです。あな

たの人生の夕べにはあの西の彼方、阿弥陀さまの国に生まれ行くのだと。

しかし一方で『仏説阿弥陀経』には、お釈迦様が「阿弥陀とは無量の光（インドの言葉でアミターバ）でもって十方世界を照らし至らぬところは無い仏である。また無量のいのち（アミターユス）でもって永遠に生きとし生ける者のうえにはたらく仏である。この故に阿弥陀と号すのである」と説かれます。

光とは空間の広がりあらわし、いのちとは時間の永遠性をあらわした言葉であります。あなたがどこにあらうとも、どのような時にあっても、はた

らき続けてある姿こそ、この阿弥陀という言葉に込められたお心であるのです。

西方浄土の阿弥陀仏が、そこに留まることなく、十方世界のすべてのいのちをみずからのはたらき場とされるのであれば、南にあるともまた、ただ今、私の「皆身」に阿弥陀仏は届いてご一緒しておられるということでもあります。海に夕日を仰ぐ時、水面に映る光が私の足下を照らし、一筋の道を示すように、西方の阿弥陀仏はそのまま皆身（南）に届いてあるのです。このころを一休禅師は詩にされたのでしよう。彼岸の浄土より阿弥陀仏は、なんまんだぶつの声となってあなたに今、届いて下さっております。